

ジェフリ・チャーサー作

トゥローイラスとクリセイデ（その七）

宮田武志訳

巻の四

巻の四の序詩はじまる。

さあれ、哀れなるかな、いともはかないかかる喜び、

これ、運命の女神の為すわざなのだ。

欺かんとする時の女神の顔、それは如何にまことしやかなことか、

愚かな人たちにいとも巧みに歌の調べを合わせ、

彼等を捉えて、盲にする力を持つのだ、もろびとを欺く女神よ！

人が女神の車から投げ出されるや、

打ち笑いつつ、顔を歪めて嘲る女神！

女神はその晴やかな顔を、トゥローイラスからねじ曲げて、

もはや、一顧だに与えず、

ジェフリ・チャーサー作トゥローイラスとクリセイデ（その七）

ジュフリ・チョーサー作トゥローイラスとクリセイデ（その七）

い〇
いとしい女人の愛情から、彼を鮮やかに投げ出して、

おのが車に、ダイオメッド(1)を乗せたのだ。

そのために、わが胸は今まさに張り裂け、

ああ、今や、手に取るわが筆は、

わがしるすべき事柄に、恐れおののくのだ。

クリセイデが、トゥローイラスを見捨てたこと、

少くとも、冷やかになったこと、

そのいきさつこそ、こののち、わが物語の主題になるのだ、

この物語の作者たちの伝えるままに、わが記憶をたどるのだ。

彼等がクリセイデをそしるべき理由を見出すとは、何と悲しいことだろう、

二〇
そして、彼等がクリセイデを誣しめるのだとすれば、

彼等こそ、まさに責めらるべきだ。

ああ、汝たちイリニーズ(2)、三人の夜の娘たちよ、

絶えざる苛責に果てしなく歎くなる、

ミジーラ、アレクター、ティシフォニよ、

また、クイライナスの父なる、汝残忍なるマーズよ、

われを助けて、巻の四を書き終らしめよ、

トゥローイラスが、命と恋を失ったことを、

ここに、つぶさに書きしるさんがために。

巻の四の序詩おわる。

巻の四はじまる。

前にも述べたとおり強大なギリシャの大軍がトゥロイの町を取り囲んでいる間のことでしたが、太陽がハーキュリーズの獅子の胸に輝く頃、たまたまある日ヘクターは、如何にしてギリシャ勢と戦うべきかを多くの勇猛な顯臣たちと評議していたのでした、何時ものことながら、全力を尽くして敵軍を悩ませるための評議です。この画策の日から戦闘予定日まで、どれくらい時日があつたかは明かではありませんが、ある日ヘクターと多数の勇士たちは、きらびやかに武装した上、槍としなやかに曲つた大弓を手にして出陣し、忽ちのうちに戦場で敵軍に直面したのです。鋭く磨ぎ澄まされた槍、矢、投箭、劍、凄^{つちほこ}い鎚矛、これらの武器を振るって終日戦いつつ、人馬を倒し、敵の脳天を戦斧で裂きました。最後の攻撃においてトゥロイ軍の戦略宜しきを得ず、夜に入るや、敗走して町に帰つたのが実状です。ポリダマス、ネスシユース、ザンシパス、サーペドン、ポリネスター、ポリティーズ、トゥロイのリフィーアス卿などや、また、フィーバシユースというような身分の低い人たちが、これらの人たちが勇戦したにも拘らず、その日アンティーナー及、捕虜^{りよ}になつてしまつたのでした。この打撃のために、その日はトゥロイの町を挙げて戦々競々、喜色は殆んど消え失せてしまいました。ギリシャ軍の要求によつて、プライアム王から休戦が申し出され、それぞれ若千名にのぼつた両軍の捕虜を交換し、差引^{六〇}き過剰分の捕虜に対しては、莫大な身代^{みのしろまん}金が支払われるべきことが議せられました。このことは忽ちのうち包圍軍の間にも、町中至るところの街という街にも知れ渡りましたが、まず最初にカルカスの耳にはいつたのです。この協約が結ばれることを知るや、カルカスはすぐさまギリシャ人の間を掻き分けて、長老たちと一緒に枢機員會議に馳せ参じ、何時もの席についた上、ぜひとも自分に敬意を表して喧騒^{せう}をやめ、自分の発言に耳を傾けていただきたいと、血相を変えて懇願し、さて次のように述べはじめました。

「皆さん、勿論周知のところでありますが、わたくしはもとトゥロイの市民でありました。ところで、ご記憶のことと存じますが、わたくしこそ、皆さんの危難に際して逸早く皆さんにご安心を与え、如何にせば勝算ありやを進言した当のカルカスであります。何故かく申すのでありましようか、皆さんの手によってトゥロイの町が日ならずして災上し、崩壊すべきことに疑の余地を存しないからであります。如何なる方

ジェフリ・チャーサー作トゥロイラスとクリセイデ（その七）

途方策によってこの町を破壊し、所期の目的を達成すべきか、そのことに関しましては既に献策して、とくとご清聴を煩わすところがあったのであります、皆さん、このことは皆さんにおかれでござ承のことと信ずるのであります。

わたくしが、皆さんのご安泰に比べれば、自己の私財乃至収入の如きには一顧だに与えず、この危急に際しての最善の方策を進言せんものと、身を以って来り投じた所以のものは、ひとえにギリシャの国民に対して親愛の情を覚えたからであります。皆さん、わたくしはこの危難に際して、皆さんのご満足を得んことを期しつつ、かくの如く全私財を擲って皆さんのもとに馳せ参じたのであります。さりながら、この莫大なる損失を蒙ったとは申せ、いささかも動ずるものではありません、誓って断言致しますが、皆さんの為とあらば、トゥロイの町に所有する一切の私財をも棄てんとするものであります。ただし、ああ、トゥロイ脱出に際し、その睡眠中、私宅に残して参りました一人の娘は、この限りではありません。酷薄無情な父！如何なればとて、かくも冷酷な心を持ち得たのでありましょうか。ああ、よし肌着一枚の姿にしろ、何故娘を同道しなかったのでありましょう！何たる悲痛ぞ、皆さんのご同情なくば、断腸の思いに明日の命をすら知らないのであります。今日まで、娘を救い出すべき機会を見出し得ないままに、沈黙して参ったのであります。今や千載一遇の時、皆さんのご同意にして得られますならば、必ずや直ちにあれを引き取り得るのであります、ご援助、ご同情賜わらんことを！皆さんの為にこの苦杯を嘗めるわたくしであります、かくも多数ご参集の方々の中ではあります、この苦境にある老骨に、一搦の涙を惜しまれないことを懇願するものであります。今や、多数のトゥロイ市民が捕虜として獄に繋がれて居ります、皆さんのご承認が得られますならば、捕虜の一人と引換えに、わたくしの娘を引き取り得るのであります。切にお願い致します。ご慈悲で以って、ああ、その多数の捕虜の一人をわたくしに賜わらんことを！トゥロイの町も人も、皆さんの手に帰する日は極めて近いのでありますから、わたくしの訴願を斥けるべき必要はあるまいと思料するのであります。

生命を賭して申しましょう、毛頭嘘偽りではありません、全くのところ、アポロの神託でもあり、わたくしは、占星、易断、占卜によって實際承知したのであります、敢えて申します。炎々たる火の手が全市を包んで、トゥロイの町が灰燼に帰する日は目睫の間に逼っているのであります。蓋し、町の城壁を造り給うたファイバスとネプチューンが、まさに国王レーオメドンに対する怨恨によって、トゥロイの市民に対して絶えず怒りを懷き給うのあまり、町を破壊せしめ給うべきは確実なことに属するからであります。国王は、これらの神々に対して報酬を支払うことを拒絶されましたので、トゥロイの町は火焰に包まれるべき運命にあるのであります。」

この白髪の老人が謙讓な言葉付きと態度で綿々と語る間、その両眼から塩からい涙がさめざめ両の頬を伝って流れるのでした。長時間に亘って援助を求めましたところ、一同はその悲痛な気持を癒やしてやろうと、更に論議を重ねることなく、アンティナーを彼に与えることにしました。けれども、カルカス以外に誰が喜んでしょうか？ 協約のために赴くべき人たちに、彼は直ちにこの要件を托し、アンティナーと交換にソアス王とクリセイデを連れて帰ってもらいたいとくれぐれ依頼したのでした。プライアム王が通行券を下附するや、使節の一行は直路トウロイに向いました。使節到来の理由が述べられるや、老王プライアムは、即座に全員会議を召集しましたが、その結果を申し上げるならば、使節の一行は、捕虜交換並びに今回の事案全部が承認せられたという最終回答を得て入城したのでした。

アンティナーと引換えたクリセイデが要求せられた時、トゥロイラスも会議の席に臨んでいましたが、その言葉を聞くや、息も殆んど絶えるかのように、彼の顔色は忽ち変りました。けれども、自分の愛情が人に気づかれてはと、このことに対しては一言も発しないで、男らしく悲しみに堪え、苦惱とはげしい恐怖に満ち溢れながら、諸議員のこれに対する発言を待っていました。そのようなことがあってはならないのですが、万一彼等がクリセイデの交換を承認した場合に為すべき二つのことを考えていたのです。それはまず第一に、如何にしてクリセイデの名誉を保つべきかということであり、次に、その交換を阻止すべき最上の方法や如何にということでありまして、このようなことについて彼はつらつら思い廻らして居たのでした。愛慕の情からすれば、クリセイデを留らせておきたくて矢も楯もたまず、彼女がこの町を去るくらいなら死んだ方がましだと思われるのですが、他方、理性は彼にかく命じました、「クリセイデの同意なしには、絶対にそのようなことをしてはならないぞ、お前がそんな真似をすれば、彼女との間に不和を生じるだろう。そして、はじめの間折角人に知られなかったのにあなたの余計なおせっかいで、二人の恋が世間にばつと知れ渡ったじゃありませんか、こう彼女は言うだろう。」そこで彼はこうするのが最善だと考えました。それはつまり、もし諸議員がクリセイデの去ることに同意しても、一応彼等の望むままに議決させておき、まずクリセイデにその議決の趣を伝えて、クリセイデの意向を聞いた上で、今度は世を挙げて極力反対しても、出来るだけ迅速に自分の行動を取ることにしようということでした。アンティナーと引換えにクリセイデを申し受けたというギリシャ側の言い分をとくと聞いたヘクターは、それに反対して真剣に答えました。

「諸君、あの婦人は囚人ではありません。誰がこの件を諸君に托したのか知りませんが、わたしとしてはすぐ様こう復命していただきたい、

ジェフリ・チョーサー作トゥロイラスとクリセイデ（その七）

つまり、われわれの町には女を売るような習慣はないんだってことですよ。」

忽ち人々が騒ぎ立てて、火のついた藁わらが燃え上るようなすさまじさです、丁度その時暫くの間、彼等が自らの破滅を自ら求めるようにと、禍の神が望んでいたからです。人々は叫びました。

「ヘクターさん、悪魔にでも、取っ憑かれたんですか、あの婦人をかばって、アンティナーさんを、^{一九〇}あの賢明で勇敢な方を、われわれから取り上げようとなさるなんて、とんでもない遣り方ですよ。周知のとおり、今やわれわれは人材を必要としています。そして、あの方こそこの町で最もすぐれた人物の一人なんです。ねえ、ヘクターさん、間違ったことをお考えになるのはよして下さい。プライアム王に申し上げます、クリセイデさんを断念することこそ、われわれすべての声なんです。」

このように人々はアンティナーを救うことを懇願したのでした。

ああ、^{二〇〇}ジューヴェナルよ、まことにあなたの言うとおりに、人々は何を望むべきかを殆んど知らず、^{二〇〇}謬念の雲に包まれて、何が最善なるかを弁えぬままに、おのが望みの中に失望の種のひそむを知り得ないので。ご覧なさい、ここにその実例がちゃんとあるのです。今やこれらの人たちは、彼等を不幸へと導いたアンティナーの救出を望んでいるのです。なぜなら、彼こそ後にトウロイの町の裏切者になったのですから。ああ、彼を放免すること早きに失したのだ！^{二一〇}ああ、世の愚かな人たちに、あなたの思慮分別を見せたいものだ。彼等に何等の害悪をも与えなかったクリセイデは、もはや幸福に浸り得ないので。けれども、^{二二〇}アンティナーを町に返せ、クリセイデを追い出せと、誰も彼も口々に叫びました。そこで、アンティナーと引換えにクリセイデを引き渡すことが会議で議せられ、ヘクターが反対の歎願を繰り返したにも拘らず、そのことが議長によって宣せられました。そして遂に、何びとが反対を唱えようとも効を奏さなかったのです。それを望むことが会議の大勢である以上、必然的にそうならなければならなかったのです。

各議員が会議の席から立ち去るや、トウロイラスはもはや何も言わないで、ただ一、二の供の者だけを連れて^{二三〇}自室に急ぎましたが、眠りたことからその供の者にすぐ退出するように命じ、大急ぎでベッドに身を横たえたのでした。冬ふゆともなれば葉が一枚ずつ剥がれて樹木が裸になり、ただ樹皮と枝のみが残されるように、今やトウロイラスはあらゆる幸福を奪われ、苦悩の黒い樹皮に包まれて、クリセイデの交換ということに心こころを労するのあまり、気もまさに狂わんばかりの状態で身を伏せていたので。やがて起き上って戸も窓もすっかり締め切ってしまう、

悲しげにベッドの側に腰をおろしましたが、その姿は蒼白な死人そっくりでありました。胸のうちに堆積した悲しみの情がにわかに迸り出て、今述べますように、全く狂乱の沙汰を演じはじめました。その様たるや、^{山二四〇}心臓を刺された野牛がここかしこに身を躍らせて、断末魔の咆哮の声を上げるのにそっくりだと申しましょか、絶えず握り拳で烈しく胸を叩きながら、部屋中を駆けずり廻って、身も砕けよとばかりに、幾度となく頭を壁に打ちつけたり、からだを床に叩きつけたりするのです。無念のあまり、勢よく湧き出る二つの泉のように、両眼から涙が流れ出て、はげしい悲しみを訴える声高い嗚咽のために言葉も奪われ、彼は辛うじてこう言えるのみでした、「^{一五〇}ああ、死よ、どうして、ぼくを死なせてくれないのだ。造物主が生あるものとして、ぼくを造り給うたとは、ああ、嫌なことだ！」そののち、彼の心をねじ曲げ、いらだたせる狂乱激怒が、時のたつにつれて稍和ぐや、休息せんものとベッドに横たわりましたけれども、ますます涙が溢れ出るのです。今ここでお話ししている彼の悲しみの半分の悲しみ、そのような悲しみにさえ、人のからだが堪え得るとすれば、驚くべきことだと言わねばなりません。

^{二六〇}彼はこのように言いました。

「運命の女神よ、ああ、悲しいことです！　ぼくが何をしたと仰有るのですか、あなたに対してどんな罪を犯したでしょうか？　どうしてあなたは、ああ、残念だ、ぼくを欺き得たのですか？　慈悲のお心をお持ちではないのですか？　このようにして、ぼくは破滅しなければならぬのですか？　このようにして、クリセイデさんは去らなければならないのですか？　それが望むところだと仰有るのですか？　ああ、どうしてあなたは、ぼくに対してかくも残忍無慈悲な心を持ち得るのですか？　あなたもよくご存じのとおり、ぼくはこれまでずっと、どの神様にもまして、あなたを尊敬して来たではありませんか。どうしてあなたは、ぼくからこのように喜びを奪おうとなさるのですか？　ああ、トゥローイラスよ、人は今お前を何と呼ぶだろう？　栄光から苦難へと墜ち込んだ悲惨極まる男と呼ぶ外はないだろう、そして、ああ、その苦難の中で、ぼくは息の絶えるまでクリセイデさんのために慟哭するのだ。

ああ、運命の女神よ、ぼくの喜びの生活が、あなたの邪悪な嫉妬心に不快の念を与えたとするならば、どうしてあなたは、トゥローイ王であるぼくの父の命を奪わなかったのですか、ぼくの兄弟を死なしめなかったのですか、歎きながら叫ぶぼく自身を殺さなかったのですか、世間の足手纏いになるばかりで何の役にも立たず、^{二八〇}絶えず死に瀕しつつも死に切れないこのぼくを！　クリセイデさんさえ、ぼくに残して下さるのなら、あなたがぼくをどこへ導こうとも、ぼくは全然意に介しません、しかし、ああ、あなたはあの女を^{ひと}ぼくから奪い去ったのです。けれども、

あなたの遣り口はいつもこうなんだ、最愛の者を人から奪い、かくすることによって、気まぐれな狂暴性を見せつけるのです。このようにして、ぼくは破滅したのだ、しかも、如何とも防ぐべき術がないのだ。

ああ、まことの神よ、ああ、恋の神よ！ ああ、神よ、ああ！ あなたこそぼくの胸のうちを、ぼくの想いのすべてを、一番よくご存じなのです。ぼくがかくも高価で買ったものを棄てなければならぬのだとすれば、^{二九〇}今の場合ぼくの悲痛な生活はどうなるでしょう？ クリセイデさんとぼくを恩寵の中に導き入れ、ぼくたち二人の心に封印を施し給うたのはあなたなのですから、ああ、あなたはその封印を取り除くことを、お許しになれる筈はありません。ああ、ぼくはどうすればいいんだろう？ 煩悶とみじめな苦痛のうちに生き永らえる間、ぼくは生れながらの一人ぼっちで、この不幸不運をかち続けなければならぬのだ。日の照るのを雨の降るのをも見ることなく、^{三〇〇}エディパスのように、暗黒のうちに悲しい生を終えて、苦悩のうちに死ぬのだ。

ああ、ここかしこをさまよい歩く疲れたわが魂よ、どうしてお前は、生きとし生ける肉体のうちで一番悲惨なこの肉体から、抜け出そうとしないのだ？ ああ、この悲しみの中にひそむ魂よ、巢から出るんだ、ぼくの胸から逃れ出るんだ、この胸を裂いてくれ、そして、お前の愛人クリセイデさんの後を追いつづけるんだ。お前のいるべき場所はもうここには無いんだよ。ああ、悲しい二つの眼よ、^{三〇〇}クリセイデさんの輝く眼を眺めることこそ、お前たちの慰みだったのだから、お前たちに今何が出来るだろう、わが心楽しまざるゆえに、お前たちは空しく開き、やがて泣き濡れて、何も見えなくなるだけなのではないか、何時もお前たちを照らしていたあの人の姿が消え去ってしまったのだから。ぼくに二つの眼が備わっていても、これからは何の役にも立たなくなるんだ、お前たちには視る力がなくなったんだから。

ああ、ぼくのクリセイデさん、ああ、このように歎くこの悲しい魂のすばらしい愛人よ、ぼくの苦しみ^{三〇〇}に誰がいま慰めを与えてくれるだろう、ああ、一人もいないんだ、そんな人は！ だけど、ぼくの心臓が絶え果てた時、^{三〇〇}あなたに向ってまっしぐらに急ぐぼくの魂、そのぼくの魂を快く受け入れてもらいたい、その魂は永久にあなたにお仕えするだろうから。ぼくの魂はかく仕えるのだ、だから、肉体の滅ぶことなんて何でもないんだ。

ああ、幸運にも運命の女神の車の上に高々と乗せられているあなたたち世の恋人よ、あなたたちが絶えず^{はがね}鋼のような恋を見出して、あなたたちの喜びの生活が末永く続くようにと、ぼくは神に祈るのだ！ ともあれ、あなたたちがぼくの墓の側を通り過ぎる時は、あなたたちの友がそ

ここに眠っていることを思い出してもらいたいのだ、取るに足らない男であれ、ぼくもまた恋をしたのだから。

三三〇 ああ、年老いた血迷える裏切男、カルカスよ、ああ、何を苦しんでギリシャ人になったのだ、トゥロイ人として生れたのに。ああ、ぼくの死の原因たるべきカルカスよ、ぼくにとって何と忌々しい時に、お前は生れ合わせたのだろう！ トゥロイの町のどこでも好きところで、お前を捕えることが出来ればいいんだが！ ジョーヴよ、そのことを喜んで許し給え！」

燃える炭火よりも熱い溜息が果てしなく次々に胸から洩れ出て、新たな歎きとまじり合い、彼の悲しみを募らせて行きましたが、かくて悲涙はとめどなく流れ出るのです。これを要するに、苦悩のために心は千々に乱れ、疲れ果てて喜びも悲しみも感じなくなり、夢うつつの状態で彼は身を伏せていたのでした。

パンダラスは会議に臨んで、貴族や市民の発言に逐一耳を傾け、アンティナーと引換えにクリセイデを差し出す件が、満場一致で可決せられるのを聞いて、気も狂わんばかりになり、悲しみのあまり、自分でも何を考えているのかが分らないという有様でしたが、^{三五〇}あたふたとトゥロイラスの所に駆けつけて行ったのでした。折しも一人の騎士が部屋の入口を守っていましたが、彼のためにすぐドアを明けてくれました。パンダラスはさめざめと涙を流しながら、いとも静かに暗い部屋の中にはいり、そっとベッドに近づきましたが、心が全く混乱して、言うべき言葉とて知らず、まさしく苦悩のために正気も失わんばかりです。悲しみのために顔つきも全く崩れ、^{三六〇}悲しげなトゥロイラスの前に腕組みしたまま立って、そのあわれな顔を見つめました。けれども、ああ、悲しみに沈む友を眺めながら、幾度となく悲痛な気持ちに襲われ、友の苦悩のために自分も悲しくなって、心臓もとまるような気がするのです。

友人のパンダラスが会いに来てくれたことに気づくや、悲しみに満ちたトゥロイラスは、日に照らされた雪のように、ぐったりとなつてしまいました。それを見て、パンダラスも悲しくてたまらず、同情のあまり、^{三七〇}トゥロイラスと同じように、さめざめ泣きはじめました。かくて、この二人は無言の行です。二人とも悲しみのあまり、一言も発し得ないのです。けれどもやがて、悲しみに沈んだトゥロイラスは、苦悩のあまり息も絶えんばかりになって、突然呻き声を上げ、啜り泣きと悲痛な溜息のうちに、悲しげな声で言いました、

「ねえ、パンダラス君、ぼくは死んじゃったよ、もう駄目なんだ。君、会議で聞かなかったかい、アンティナーさんと引換えにクリセイデさんを取られるってことを？」

全く死人のように青ざめたパンダラスは、^{三八〇}いとも悲しげに答えました。

「ええ、たしかに。ぼくの聞いた事柄は、まぎれもない事実なんです。これが間違いならどんなにいいでしょう。事情はすっかり聞いて知ってますよ。ああ、神よ、誰がこんなことを信じたでしょう？ 運命がわれわれの喜びを瞬くの間に叩きつぶしてしまうなんて、誰がそんなことを想像したでしょう？ だって、偶然な出来事によって、これ以上奇妙な破滅の憂目を見た者は、この世界に一人もいないだろうと思えますね。だけど、すべての事を避けたり予測したりすることは、誰にだって出来っありませんよ。^{三九〇}世の中って、そんなものですよ。だから、ぼくはこう断定したいんです、それはですね、何びとも運命の女神の恵みを、常に自分だけ確実に受け得ることを期待してはならない。運命の女神の恩恵は、すべての人に共通なんだったことですよ。

それはともかくとして、お聞かせいただきたいんですが、どうしてあなたは、今こんなに気も狂うほどお悲しみになるんですか？ どうしてそんなに横になってばかり居らっしゃるんですか？ すっかりお望が叶って、当然充分満足なさるべきじゃありませんか。死ぬまでこんな工合に泣き悲しんで然るべきは、このぼくですよ、だって、愛人のために尽くしたのに、ぼくは一度だって優しい顔だの、優しい眼つきだの、恩恵に浴した覚えがないんですからね。^{四〇〇}それにまた、あなたご自身がご存じのことなんです、淑女ならこの町の至るところに居るんですし、これはぼくの見るところなんです、女性群のうちには、クリセイデくらいの女が十二人束になったって、かないっこないような、奇麗な女性の人や、二人は、必ず見つけ出せますよ。だから喜んでいただきたいですね、親愛な兄弟とも言うべき殿下！ クリセイデを失っても、われわれは別の女性を見つけることが出来るんです。いいですか、専らある一人の女性にばかり喜びを感じて、他の人には感じないなんてことは、絶対にいけませんよ。甲の女性が歌に長じていれば、乙の女性はダンスが上手、^{四一〇}ある女性が親切なら、別の女性は嬉々として快活、この女性が美しくければ、あの女性はお行儀満点、こういうわけですよ、蒼鷺を捕える鷹あれば、水禽を捕える鷹ありって工合に、各その長ずるところに従って尊ばれるんです。また、大賢^{四三}ジュークシスの言うとおり、新しい恋は、しばしば古い恋を追い出すものですよ。そして、新しい事態には新しい熟慮が必要です。

それにまた、あなたは是非ともお命を全うなさらないければならなかったこと、そのことをよくお考え下さい。今度のような情熱は、その性質上、時がたてば冷めて来ますよ、だって、偶発的な喜びに過ぎないんですから、^{四二〇}何か別の事が偶然起れば、お忘れになってしまいますよ。

新しい恋だの、苦勞だの、そのほかの心配事だのが起ったり、恋人にたまにしか逢えないってことになったりすれば、古い愛情などは跡形もなく消えてしまうもので、これは夜に昼がつづくように、間違ない事実ですよ。あなたの場合にも、何か一つこのようなことが起って、はげしいご心痛は薄らいで来ますよ。クリセイデがいなくても、あれのことがお心から消える一因になるでしょうね。」

トゥロイラスが悲しみのあまり死んでしまつてはと心配して、彼を助けるために、パンダラスは取りあえず口から出まかせに、このように言つたのでした、つまり、^{四三〇}トゥロイラスの悲しみを鎮めたいばかりに、くだらないことを喋っていることに頓着する余裕がなかったからに相違ありません。けれども、悲しみのために命も絶えんばかりになつてゐるトゥロイラスは、パンダラスの言うことには殆んど心をとめず、一方の耳から聞いて他の耳から抜けてしまふという有様でした。ともあれ、彼はやつと答えて言いました。

「ねえ、君、君の言うような治療法、君の言うような方法で癒やされることは、ぼくが悪魔であれば、大變結構なことだろうよ、ぼくに對して真心を持っていてくれるあの人を裏切ることができるような悪魔ならね。だけど眞つ平だよ、こんな忠告は。君の教えてくれるように振舞うくらいなら、^{四四〇}この場ですぐ死なせてもらいたいね。君が何て言おうが、ぼくは死ぬまで完全にあの人のもなんだ、ぼくの仕えてゐるあの人、まさに心を捧げているあの人さ。だって、パンダラス君、あの人に誠実を誓つた以上、ほかの女性のためにあの人に對して不誠実でありたくはないよ、常にあの人を愛人として生き、そして死ぬ覚悟だよ、ほかの女性には決して仕えない積りだ。あの人に劣らないような佳人を見つけてやろうって、君は言うんだが、^{四五〇}よしてくれ給えよ、そんなことは。自然によつてこの世につくられたものとの比較はご免蒙りたいよ。ねえ、親愛なるパンダラス君、この点に關しては、要するにぼくは君とすっかり見解を異にするんだよ。だからお願いだ、何も言わないでくれ給え、君の言葉を聞くと、ぼくは死にたくなるよ。君の忠告は、ぼくが新規時き直しに別の女性を愛して、クリセイデさんとは手を切れて言うにあるんだ！ 君、そんなこと出来っこないよ、ぼくには。いや、出来るとしても、^{四六〇}したくないさ。それ、この球、さあ、この球って工合に、千変萬化、恋のラケットを前後に振ることが君に出来るとすれば、君の煩悶を心配してくれる君の愛人こそ迷惑な話さ。それにまた、パンダラス君、君のぼくに對する態度たるや、誰かが煩悶してゐる時、その人のそばに歩み寄つて、くよくよ考えるのをよせば悲しみは感じなくなるよって言うようなものだよ。まず最初にぼくを石に変えて、ぼくの情熱を根こそぎにしてくれるのでなければ、ぼくの悲しみはそう簡単には鎮まらないさ。悲しみが心の奥深く沈み込んだ挙句の果て、^{四七〇}死がぼくの胸から生命を奪うかも知れないんだ。だけど、クリセイデさんの射た矢が、

ぼくの心から抜けることは断じてないよ。ぼくが死ぬれば黄泉よみに降って行って、¹⁴プローサーペニと一緒に苦しみのうちに住み、永久に不幸をかこちながら、ぼくたち二人の仲を割かれたことを歎くだろうよ。

君は最後にこう言ったね、つまり、クリセイデさんは一旦ぼくのものになって、¹⁴⁸一緒に楽しく幸福に暮らしたんだから、あの人を断念することは大して苦痛じゃあるまいってね。どうして君は、腹にもないことを言うんだい？ 幸福から投げ出された者は、まだ幸福を味わったことのない者より更に不幸なんです、君は¹⁴⁹こんなことを言ったことがあるじゃないか。それはともかくとして、一つ話してもらいたいことがあるんだ、この女性からあの女性へと、絶えず移り気を起すことなど朝飯前だ、こう心得ている君がさ、どうして君のすべての悩みの原因たる君の愛人を取り替えることに、全力を注がなかったんだい？ なぜその愛人を忘れ去ろうとしないんだね？ ¹⁴⁹君の心を落着かせてくれるような外の人を、どうして愛しようとしなないんだい？ 君が嘗て恋の不幸を味わいながら、しかもその恋を心から払いのけることが出来ないのだとすればだね、凡そ人間として可能な限り楽しく愉快にあの人と過ごしたぼくに、それを忘れるってことが、それをさっさと忘れるなんてことが、どうして出来るだろう。ああ、君は何処にそんなに長くお籠りして居たんだね、仲々上手に、理路整然と議論するじゃないか。いや、君の忠告などには何の価値もないんだ、たしかに。だから、¹⁵⁰どんなことが起ろうが、ぼくはこれ以上何も言わないで死ぬ積りだよ。

ああ、汝、すべての悲しみを終らしめる死よ、ぼくはこれほど何度も、お前を呼び求めるんだ、すぐ来てくれ、だって、全くのところ、¹⁵⁰度々呼び求められた挙句やって来て、苦痛を終らせてくれる死は、親切者なんだから。ぼくの生活が平穩だった時には、お前に賄賂を与えても、ぼくはお前に殺されたくなかった、それはたしかなことだ。しかし今となっては、お前に来てもらうことがとても楽しく思われるんだ、この世の中でお前に来てもらうことくらい、ぼくの望むことは外にないんだ。ああ、死よ、ぼくは悲憤に燃えているんだ、¹⁵¹だから、ぼくをすぐさま涙に溺らせてくれ、それとも、お前の冷たい一撃で、ぼくの熱を冷ましてくれ。お前は日夜、頼まれもしないのに、色々な方法で、無数の人たちを、その意志に反して殺してゐるんだ、だから、ぼくの頼みに応じて、ぼくの為に一肌脱いでくれ、つまり、ぼくくらい悲惨な者は未だ嘗ていなかっただろうが、そのぼくを今この世から除いてくれると言うんだよ、それがお前の果たすべき義務なんだ、だって、今こそぼくの死ぬべき時なんだよ、この世の中でぼくはまさしく何の役にも立たないんだから。」

かくてトゥロイラスは、¹⁵¹蒸溜器からとめどなく液体が滴り落ちるようにさめざめと涙を流しました。パンダラスは沈黙のまま目を伏せてい

ましたが、そのうちやっと、こう考えつきました、「そうだ、友達を死なせるくらいなら、もっと何か言ってみよう。」そこで、口を開いて言いますには、

「トゥロイラスさん、あなたはこれほどお苦しみになり、また、ぼくの言うことを非難しようとなさるんですが、なぜご自分から進んで救済策を講じて、男らしいご気性でご煩悶をすっかり追い出してしまおうとなさらないんですか。クリセイデを奪い返しにお行きになれないなんて、醜態じゃありませんか。あれをこの町からすっぱり出て行かせるか、それとも、この町に引きとめておいて、他愛なく悲しむのをおやめになるか、どちらかにしていただきたいですね。あなたは今トゥロイの町に居らっしゃるんですよ、それなのに、あなたを愛し、あなたのお心に唯々として従う女性をつかまえる勇気がないって仰有るんですか、だとすれば、愚の骨頂じゃありませんか。さあ、すぐ立ち上って下さい、泣くのはおよしになって、男らしいところを見せていただきたいですね、ぼくが死ぬか、クリセイデがわれわれのものとして残るか、この一時間の内にきまるんですから。」

五四〇
トゥロイラスはそれに対して静かに答えました。

「そうだ、親愛なるパンダラス君、そのことは、ぼく自身これまで何度も考えたんだ、いや、君の考える以上のことを考えたんだよ。だのに、なぜまだ実行しないのか、その点をよく聞いてもらいたいんだ。ぼくの言うことを聴いた上で、君の意見を言ってくれ給え。まず第一に、君も知ってることなんだが、トゥロイの町が今度の戦争に巻き込まれたのが、暴力による女性の略奪^四ということにその端を発している以上、^{五五〇}このような状況のもとであって、ぼくが過ちを繰り返してそのような一大不法行為を働くようなことは、断じて許されないといいよう。また、あの人は町の利益の為に交換されるんだから、ぼくがそんなことをやって、父の承認するところに背くような結果になれば、ぼくはきつとみんなから非難されるに相違ないよ。あの人の同意が得られるなら、父の温情に縋って、父からあの人を貰い受けることにしようかとも考えたんだ、だがまた、こうも考えるんだよ、それは、ぼくがあの人を手に入れることは明かに不可能なんだから、そんなことをやってみたって、あの人が世間の非難を浴びるだけだろうってことなんだ、だって、父は会議っていう蔽めしいところで、あの人の交換の件に署名した以上、^{五六〇}ぼくの為だからって、その宣言を撤回しないだろうからね。

しかし、ぼくが一番恐れるのは、ぼくがそんなことを実行に移せば、まあ乱暴なことをやってわけで、あの人の心を騒がせることになるだろう

ってことなんだ、だって、ぼくが公然騒ぎを起せば、きつとあの人に面目を失わせることになるだろうからね。あの人の名誉を傷つけるくらいなら、ぼくは死ぬ方がずっといいんだ。あの人の名誉より自分の命を全うする方が大切だなんてことは、絶対に考えられないんだよ。そんなわけ、ぼくはどうかやら破局に直面しているようだが、だって確かに、あの人の騎士たる以上、ぼくはどんな場合にも恋人の当然の義務として、^{五七〇}自分自身のことよりも、あの人の名誉を重んじなければならぬからね。そこで、ぼくは慾望と理性との間で、引っ張り綱になってる形なんだ。慾望はあの人の心を騒がせろって教えるんだが、理性は否と教えるんだよ、そしてこれが心配の種なんだよ。」

かくて、とめどなく泣きながら、彼は言葉をつづけるのでした。

「ああ、どうすればいいだろう、哀れなこのぼくは。だって、パンダラス君、あの人がますます恋しくなるのに、期待は刻々薄れて行くような気がするんだよ。煩悶の種もますます増大するばかりだ。^{五八〇}ああ、悲しいことだ、どうしてこの胸が張り裂けてくれないんだろう。だって、恋しくて恋しくて、心が鎮まりそうにもないんだ。」

パンダラスは答えて言いました。

「トゥロイラスさん、お好きなようにしていただいて結構ですよ、ぼくは。だけど、もしぼくがこれほど熱烈な恋をしたのだったら、そして、あなたのような地位にあると仮定すれば、ぼくはあれに自分と行動を共にさせますね。町中の人々が口を揃えて喚き散らしても、騒ぎ立てられたって痛くも痒くもありませんよ。だって、散々喚き立ててしまえば、そのあとは、ひそひそ声になるでしょうからね。町の噂も九日限りって言うじゃありませんか。深刻に理性を働かせて、^{五九〇}お上品にあれこれと前以ってお考えになるよりも、今すぐご自身をお救いにならなくちゃあ。ほかの人ならまだしも、あなたがお泣きになっちゃ困りますよ、殊にあなたの方お二人が一心同体だって場合なんですからね。さあ、お立ち下さい。あれをお行かせになっちゃ駄目ですよ、絶対に。少々非難をお受けになったって、その方がいいじゃありませんか、傷をなさったってわけでもないのに、^{六〇〇}衄よぶのようにここでお命をお落しになるよりは。最愛の人をお引き留めになるのは、あなたにとって、恥辱でもなければ、悪いことでもありませんよ。あれをこのままギリシャ軍に引き渡しておしまになれば、あれはあなたを無分別な方だっけ思うかも知れませんが、

^{六〇〇}こう言うこともお考えいただきたいですね、あなたもよくご存じのことでしょうが、つまり、運命の女神は勇者の事を成さんとするに当り、

彼を助くるも、その懦怯ゆえに懦者を避くべしってことですよ。あなたの愛人は少々心を痛めるかも知れませんが、あなたのお心持は今後和ぐでしょうよ。けれど、あれが今の場合、あなたのご行為を悪く取るなんてことは、ぼくとしては信じられませんね。だから、おっかなびっくりで、びくびくなさることはありませんよ。兄君のパンダラスさんが愛人をお持ちになつてゐるってことも、お考えいただきたいですね。ですから、あなたが愛人をお持ちになっちゃいけないってわけがないじゃありませんか。

六二〇 トウローイラスさん、きっぱり申し上げたいことが一つあるんですがね、それは、あなたの愛人たるクリセイデがあなたに劣らずあなたを愛しているのなら、よしあなたが今度の不幸な出来事で、その対策をすぐさまお講じになつても、それを悪く取るなんてことは断じてないだろうってことなんです。もしあれがあなたを置いてきぼりにすることを望むようなら、それこそ、不誠実な証拠なんです。あなたも今ほどあれをお愛しにならなくてもいいってことになりますよ。ですから、元氣をお出しになつて、騎士らしくこうお考え下さい、つまり、法律が恋愛によつて破られるのは、日常茶飯事だつて風にね。今ですよ、勇氣と底力をちよつぱりお示しになるのは、^{六二〇}何ものをも恐れずに、ご自分を大切になさつて下さい。この悲惨な不幸のために、お心が嘔み散らされるようじゃ駐目ですよ。男らしく一六勝負をおやりになることですね。もし愛の殉教者ってことにおなりになれば、天国行きですよ。ぼく自身、あなたのご行為にご協力する積りなんです。忽ちのうちに一家眷属^{けん}もろとも、からだ中に無数の血腥い大怪我をして、犬ころのように路ばたで野垂れ死しても構いませんよ。ぼくはどんな場合にもあなたをお助けする積りなんです。だけど、もしあなたが此処でみじめな様で死にたいって仰有るのなら、それまでです。^{六三〇}くよくよする人は悪魔のご厄介になれ
ばいいんですよ。」

この言葉に元氣づいて、トウローイラスは言いました。

「パンダラス君、ありがとう、君の言うことは尤もだと思ふよ、だけど、どんなに君にけしかけられたつて、また、どれほど苦痛にさいなまれたつて、要するに、あの人がそのことを望まない限り、あの人を強奪しようなんて、絶対に考えないね、死んでもその気になれないよ。」

「いや、ぼくも今日一日その思つてたんです。それはそれとして、お聞かせいただきたいんですが、こんなにお悲しみになるのは、あれの意志をお確めになつた上のことなんででしょうか。」

六四〇 「いや、まだだよ。」

ジェフリ・チャーサー作トウローイラスとクリセイデ（その七）

「じゃあ、どうしてそんなに、うろろろなさるんですか、あれにはまだお会いになってないんですから、強奪されることを果してあれが嫌がるかどうかってことは、お分りにならない訳じゃありませんか、ジョーヴの神が耳もとでそう囁いたのでもないかぎりね。だから、何事もなかったって風にすぐお立ち上りになる、顔をお洗いになる、その上で王様のところにお出でになるんですよ。でなければ、あなたがどこにお出でになったんだらうって訳で、王様が変にお思いになりますよ。機転を利かせて、上手に王様やほかの人たちを煙にお巻きにならなくちゃ、ひょっとすると、王様があなたを呼びに、人をおよこしになるかも知れませんかよ、突然ね。

^{六五〇}要するに、トゥローイラスさん、樂觀なさって、この仕事はぼくにお任せ下さいよ、こういう工合に、間違なく段取りをつけますから、つまり、今夜のうちに何時か必ず、あなたが何とかしてクリセイデとこっそりお話しになれて、すぐあれの気持がすっかり、あれの顔色から読み取れもするし、また、あれの言うことから聞きただしもお出来になる、そして今度のことをどう処理すれば一番いいかってことの判断がおつきになる、こういうわけですよ。じゃ、これで失礼しますよ。このことには自信があるんですからね。」

^{六六〇}真偽いずれをも逸早く伝える噂は敏速な翼に乗って、人から人へとトゥローイの町を隈なく飛び廻り、新しい情報としてこの話を弘めました、この話とはつまり、容色うるわしいカルカスの娘がアンティナーと交換されることが、会議で最終的に承認せられたということなのです。この噂がクリセイデの耳に入るや、この事件に関するかぎり、父のことは全く念頭に浮ばず、また、父の生死すら頭になかったクリセイデは、^{六七〇}このような協約を取り極めた人たちに禍あれと、熱心にジュピターに祈るのでした。けれども、かいつまんで申しますと、この噂が真実であればと、彼女は恐しさのあまり、誰にも尋ねてみる勇気が出なかったのです。全心全霊をすっかりトゥローイラスに托し、この世のどんな人でも、その恋情を解きほぐすことも、その心からトゥローイラスの姿を消すことも出来ないクリセイデのこととて、彼女は生涯を通じて彼のものたらんと心にきめて居たのです。かくて、恋と恐怖に心は燃え、採るべき最上の道の何たるかを判断し得ないのでした。

町でもどこでも、婦人たちがよく友達を訪問するものだということは、^{六八〇}人の知るところですが、クリセイデの許にも、悲喜相半ばする気持ちで、婦人たちが大勢連れ立ってやって来て、彼女の心を楽しませようとはしました。町に住んで居るこれらの婦人たちは、愚にもつかないお喋りをしながら、腰をおろして語るのです。

まず一人の婦人が言いました、

「あなたの為に心からお喜び申し上げますわ、だって、お父様にお会いになれるのですもの。」

今一人の婦人が言いますには、

「わたしは別の気持よ、^{六九〇}だって、こんなに早くお別れしなければならぬのですもの。」

第三の婦人は言いました、

「クリセイデさんのお蔭で、きっと町中が平和になると思いますわ。クリセイデさんがお出かけになる時、神様がお導き下さいますように！」

女らしいこれらの言葉も、クリセイデは自分がその場に居合わせないかのように、上の空で聞いていたのです。たしかに、心は別のことに置かれていたからです。からだはこれらの婦人たちの中に坐っているのですが、心は絶えずあらぬ方に注がれていました。彼女の心はしきりにトゥローイラスを追い求め、沈黙のままで絶えず彼のことを考えていたのです。クリセイデを喜ばせようと思っていた婦人たちは、つまりないことばかり話すのですが、その間中ずっと、これらの婦人たちの思い及ばない情熱で胸が燃え立っていた彼女の心を、そのような無駄口が和げてくれる筈はなく、彼女は悲しくもあり、また、これらの婦人が煩わしくもあって、心が消え入るように思われるのでした。そのため、彼女はもはや涙を抑え切れなくなり、泉のように涙が湧き出て来て、心がその中に包まれてじっと堪えなければならぬ^{七〇}激しい苦悩、そのような苦悩がまざまざと外に現われ出しました。そして、トゥローイラスに逢うことを断念する以上、今自分は、天国からそのような苦悩の地獄に落ちたのだと思ひ浮べて、彼女は悲しげに溜息をついたのでした。

クリセイデが泣いたり、はげしく溜息をついたりするのは、彼女が自分たちの仲間から去って、もう一緒に打ち興じることが出来ないからだろう、彼女のまわりに坐っている他愛もない婦人たちは、このように思いました。クリセイデを以前から知っているこれらの婦人たちは、彼女がそのように泣くのを眺め、それは彼女の優しい心根のためだろうと思つて、一人残らず彼女の苦悩を憐み、自分たちもまた涙を流すのでした。そして、クリセイデが全然考えてもないような事柄について、熱心に彼女を慰め、四方山の話をして彼女を楽しませようとし、明るい気持ちになるようにと、しきりに頼むのでした。けれども、そのようなことで、クリセイデの心をどれだけ和げ得たでしょう。丁度、頭痛がするからとて、踵を爪で搔いて貰って、ほっとするくらいのもんじゃないありませんか。ともあれ、このような馬鹿げた無駄口を利いたのち、^{七三〇}これらの婦

人たちは別れを告げて、一人残らず帰って行きました。

哀れにも悲しみに満ちたクリセイデは、広間を出て自室にはいり、死んだようにベッドの上に倒れて、二度と起き上るまいと決心したのでした。その挙動をお話し致しましょう。波打つ金髪を掻きむしり、何度も細長い指を固く組み合わせて、われを憐み給え、わが悲しみを死もて癒やし給えと、神に祈るのでした。嘗ては明るかった顔色も今は青ざめて、悲しみと苦悩の様子をありありと示しましたが、悲歎のあまり啜り泣きながら、彼女は言いました、

「ああ、悪い星のもとに生れたまじめなわたし、不幸なわたし、わたしはここを去って、わたしの騎士様から離れなければならないんだわ。ああ、この二つの眼で、あの方のお姿を初めて見たあの日、なんて悪い日だったのだろう、あの日は！ わたしがこんなに苦しむのは、みんなあの日のためなんだし、あの方があのようにお苦しみなるのには、みんなわたしのためなんだわ。」

七五〇
そう言うと同時に、涙が両方の眼から四月の驟雨のように、さっと流れ落ち、彼女は白い胸を叩きながら、悲しみのあまり幾度となく死を求めて泣き叫ぶのでした。何時も自分の悲しみを和げてくれた人を、今や思い切らなければならなかったからです。この不幸な出来事のために、自分が寄辺のない人間になってしまったように思われ、彼女はこのように言いました、

「あの方はどうなさるだろう？ わたしはどうすればいいのかしら？ あの方とお別れすることになれば、どうして暮せばいいかしら？ ああ、大好きなあなた、^{七六〇}あなたのお悲しみをなくして差上げることが誰に出来るでしょう！ ああ、父上カルカス様、みんな父上のご責任ですわ。ああ、母上アージャ様、母上がわたしをお産みになった日の恨めしいこと！ 何の為にわたしはこんな悲しい生活を続けなければならぬのかしら？ ^{七六〇}魚は水を離れてどうして生きて行けるだろう？ トゥローイラス様を離れてクリセイデにどんな価値があるかしら？ 植物も動物も自然の食物がなければ、^{七七〇}どうして生きて行けるだろう？ だって、植物根を失えば、速かに枯死するものなりって諺を、何度も聞いたことがあるんだもの。

刀や槍などは恐しくて使えませんから、わたくし、こうすることに致しますわ、つまり、あなたとお別れする日に、お別れが悲しいのに死に切れないってことがあれば、一切の飲食を絶って、わたくしの胸から魂を追い出した上、自分で命を絶つ積りですわ。トゥローイラス様、わたくしの衣裳は黒づくめに致しましょう。愛するあなた、^{七八〇}それは、いつもあなたのお心を和げて差し上げたわたくしが、この世を去って行く印で

すわ。死ぬまでの間ずっと、わたくしのお宗旨の戒律は、悲しみと歎きと禁慾することに致しますわ、あなたの居らっしゃらない所で。わたくしの胸に、そしてまた、胸の中の悲しい魂に、わたくし言い残しておきますわ、あなたの魂と一緒に、いついつまでも歎き悲しむようになって。だって、二つの魂は決して離れないんですもの。なぜって、わたしたち二人がこの世で離ればなれにされても、あのエリジウム^{七九〇}って呼ばれる苦しみのない慈悲の楽土では、ご一緒に住めるのですもの、オーフィアスとその妻のユーディシーのように。ああ、愛するあなた、わたくし間もなくアンティナー様と交換されるだろうと思えますわ。でも、そのような悲しいことになった場合、あなたはどうかなさるでしょうか？ あなたの優しいお心が、どうしてそれに堪えられるでしょうか？ とにかく、愛するあなた、この悲しみと苦しみを、そしてまた、このわたくしをお忘れになって下さいませ。あなたさえお元気でいて下さるなら、死ぬことなど、わたくし本当に何でもありませんわ。」

^{八〇〇} 苦しみのうちに洩らしたクリセイデの歎きの言葉を、どのように読み上げ、どのように歌い得るでしょう、わたしには分りません。ともあれ、舌足らずのわたしなどが、彼女の悲しみを語ろうとすれば、実際ほどの悲しみには思えなくなってしまつて、その激しい歎きを、稚拙にも台無しにしてしまうでしょうから、今は触れないことに致しましょう。

トゥローイラスからの使として、クリセイデのもとによこされたパンダラスは―すでにご承知のように、最善の方法としてパンダラスが使に立てられることが極められ、彼は喜んでトゥローイラスの為に、この一役を買ったのですが―使の趣の一部始終を伝えんものと、苦惱と狂乱のうち身を伏せているクリセイデの所に、^{八〇〇} ひそやかにやって来て、その哀れな挙動を目撃しました。胸と言わず顔と言わず、塩からい涙で濡れます。金色の豊かな頭髮は解けて、両耳のまわりに垂れ下がっています。この様たるや、彼女の心の望んでいた殉愛の兆^{まきし}そのもののように、パンダラスの目に映りました。^{八〇〇} 彼の姿を見るや、悲しさのあまりクリセイデはすぐさま、涙に濡れた顔を両腕の間に隠しました。それを見て、パンダラスは全く悲しくなり、気の毒でたまらなくなつて、家の中に居たたまれなくなりました、と言いますのは、クリセイデは前にもひどく悲しんでいましたが、今やその何層倍もはげしく泣き叫びはじめたからです。はげしい歎きのうちに彼女が言いますには、

「わたしの味わたあ喜び、この喜び、それも元をただせば、みんな叔父様のお蔭なんですけれど、^{八三〇} その喜びも今ではみじめな悲しみに変わってしまったわ。ああ、こんなことになつてしまつたわたしの恋愛、その恋愛に初めてわたしをお導き下さつた叔父様、今その叔父様に、よくいらつしゃいましたって、申し上げるべきでしょうか、どうですかしら？ 恋つてものは、悲しみに終るものなんでしょうか？ そうなん

わ、きつと！ この世の幸福のすべてが、そうなんだと思えますわ。幸福の果てには悲しみが付きものなんだわ。そうじゃないってお考えになる方は、この悲しい哀れなわたしをご覧になればいいんですわ。自分自身が嫌になり、この世に生れて来たことを絶えず呪い、^{八四〇}不幸から更に大きな不幸へと落ちて行くような気がしてならないこのわたしをご覧になることですわ。わたしをご覧になれば、悲しみ、苦しみ、悩み、歎き、不幸、災難が、一度に全部ご覧になれますわ。あらゆる不幸がわたしのみじめなからだに取っついてるんだわ、苦悩、煩悶、はげしい悲哀、苦悶、悲痛、恐怖、狂乱、病気など。わたしのはげしい悲惨な苦しみを隣んで、涙の雨が空から降って来ますわ、きつと。」

パンドラスが言いますには、

「お前、大変がっかりしてる様子だが、どうしようって言うの、お前の考えは？ ^{八五〇}少しは自分を大切にしなくちゃ。ああ、どうしてそんなに自分で自分を駄目にしてしまおうとするのさ。いけないよ、そんなこと。今、ぼくの話すことを快く聞いてくれないか、伝えてくれるようにって、トゥロイラスさんから言付^{こと}かって来たことなんだが。」

〔注解〕

巻の四

- (1) トゥロイ攻略におけるアキリーズに次ぐ勇士。オディシユースが、トゥラキヤの王子リーサス (Rhesus) の馬とパラス (Pallas) の像を盗むのを手伝った人物。クリセイデが彼に靡^{なひ}いたために、トゥロイラスの悲劇が起る。
- (2) 巻の一の第九行目に出たフューリズ (Furies) のことで、復讐の三女神。
- (3) 獅子座のこと。ハーキュリーズの名を出したのは、彼がニーミヤ (Nemea) の獅子を殺したことに因む。なお、太陽は七月の下旬から八月の月上旬にかけて獅子座に在る。
- (4) トゥロイの元老のなかの智者。ギリシャ軍の捕虜^{とりこ}になるが、クリセイデと交換にトゥロイに送還せられる。
- (5) 太陽神としてのアポロ。
- (6) ローマの海神で、ギリシャのポースイドン (Poseidon) にあたる。
- (7) トゥロイの国王で、プライアム王の父。ジュースの怒りを買ったポースイドンとアポロは、トゥロイ王レーオメドンに仕えるべく運命づけられ、前者はトゥロイの城壁をつくり、後者は国王の羊番になって働いたが、国王が報酬を払わなかったので、ポースイドンは怒って、海の怪物をトゥロイに送った。ハーキュリーズがこの怪物を退治したが、国王は彼にも報酬を払わなかったので、ハーキュリーズは怒ってトゥロイを攻め、国王を殺した。
- (8) ギリシャのカリドン (Calydnon) の王で、トゥロイの攻略に従った。

- (9) ローマの諷刺詩人(60?—140?)
- (10) 参照―ダンテ、地獄界、第三歌、第一二―四行、「秋の木の葉の一葉、一葉と相次ぎて離れ去り、終には枝のその獲物はすべて地上にあるを見る。」
- (11) 参照―ダンテ、地獄界、第十二歌、第二二―四行、「死の撲撃を受けし刹那に、絆を離れ、歩み行くこともかなわず、ここかしこと跳ね廻る牡牛の如く。」
- (12) テーベの王。過って父レイアス(Laius)を殺し、知らずに母と結婚したのを知って、自らの両眼をくり抜いた。
- (13) チョーサーはZanisと綴っているが、ZeuxisのCorruptionか。Zeuxisは紀元前五世紀のギリシャの画家。
- (14) 黄泉の国王プルター(P Pluto)の妻で、夫と共に死者の諸霊に君臨した。
- (15) 卷の三の第一六二五―八行参照。
- (16) 参照―Boethius, 1, Met. 1 「死は幸だ、若しそれが生を楽しんでいる間に来ず、そして悲しめる人々の招きにはしばしば応ずるなら。」
- (17) トゥロイのプライアム王の妹ヒサイオニー(Hesione)がギリシャのサラミス(Saramis)王のテラモン(Telamon)に奪い去られた報復として、プライアムの子パリス(Paris)がスパルタ王メネレーアス(Menelaus)の後ヘレン(Helen)を奪ったことを指す。
- (18) ギリシャ神話によれば、善人が死後に住む楽土。
- (19) トウラキヤの豎琴の名手。死別した妻ユリディシー(Eurydice)の後を追って下界に降り、音楽の力で妻を救い出すが、後を振り向かないようにという約束を破って、妻が後からついて来るかどうかを見ようと振り向いたために、妻は再び地獄に落ちる。
- (20) 参照―箴言、一四・一三、「笑う時にも心に悲あり、歓楽の終に憂あり。」